

鎌倉時代紀行文学の考察

——海道記・東關紀行・十六夜日記について——

中 里 重 吉

- 1 紀行文学の基盤としての東海道の交通
- 2 中世紀紀行文学の特質
- 3 『海道記』『東關紀行』『十六夜日記』

日本文学史の流れの中で、紀行文学のみの流れを、あえて紀行文学史と称することが許されるなら、その紀行文学史の流れをさぐるために、その流れの中に位置する現存の作品を、飛石つたいにたどることもできる。

そこで、このたびは鎌倉時代の紀行文学作品として、現存の『海道記』『東關紀行』『十六夜日記』の三つを考察することにした。

鎌倉時代は中世が形成されていく時期で、文学史的には、平安王朝時代の和歌・物語の世界がそのまま残存しているところに、新興文学としての、軍記物や隠者文学や連歌などが台頭してくる。

これを、この三作品の上に、王朝の系統の所産としての『十六夜日記』を、新興文学の系譜に立つものとして『海道記』『東關紀行』を位置づけることができる。

ここでは、まずこれらの作品がいずれも東海道を京都から鎌倉に下向する旅の記であるが故に、これらの作品の基盤をなす東海道の交通の様相を記し、次に当代の中世的所産としての三作品の紀行文学的特質を概観し、これをさらに三作品の個々について究めてみたいと思う。

1 紀行文学の基盤としての東海道の交通

鎌倉時代紀行文学の考察

鎌倉時代の交通は、鎌倉幕府の開設とともに始まった。建久3年(1192)源頼朝が幕府を創始すると、幕府を中央機関とし、そのもとに京都守護(六波羅府)、鎮西奉行、奥州奉行を特設し、地方機関として全国一律に守護地頭において鎌倉幕府による武家政治の体制を確立した。

我国の交通史の上からみるならば、古代の大和奈良時代から平安時代を経て、鎌倉時代に及んで、交通の整備と利便が進み、すなわち、律令制時代の交通から荘園制時代への交通に進展してきた。

かつて古代律令制下において、交通運輸の根幹的な主体が、常時においては官吏でありまた国家的貢納物であったのに、平安中期以降荘園制の発展とともに、荘園制交通が次第に発達し、中世前期には荘園をめぐる荘園年貢物の輸送と荘官など荘園関係者の往来に交替した。(日本歴史叢書 18・新城常三著『鎌倉時代の交通』第一鎌倉時代交通の諸相、——一荘園制下の交通1の(1))

そして、時たま戦時における軍旅である、征討のための軍団の移動があったし、これが広汎長期に及ぶ場合もあった。このほかに、やがて商用や修行、行脚のための旅行も目立ってくる。

すでに律令制交通の時代に、畿内五か国から四辺へ通ずる街道の交通が整い、その中でも鎮西太宰府に連る山陽・西海道や、東国陸奥に通ずる東海・東山の両道はとくに、その繁栄に向かっていった。

今や、鎌倉が政治の中心となるに至って、交通の中心も京都の王城の地から、鎌倉の新政権の地に移ってきた。

頼朝は、鎌倉に集権の実をあげるために、駅制の整備、道路の開通に努めた。

政治の中心の移動から、京都と鎌倉の往来が頻繁となってくるのは当然である。頼朝は武家による新政権を樹立したとはいえ、京都の紳縉公卿の協力をまつところが多く、大江広元が政所別当として、三善康信が問注所執事として、都より来って新政権の枢機に参画したことなどは、その顕著なものである。

後述するごとく、幕府の朝廷に対する施策や、鎮西統治等の政治上の動きが、当然武家と公家との交渉を密にし、それがさらに姻籍関係を生み、文化の流入が

はかられるなど、京都と鎌倉の交通往来は濃度を加えていった。

すなわち、実情としては、

幕府と朝廷または六波羅府との不断の使者の差遣

飛脚の往来

鎮西太宰府との往還

幕府関係者、東国御家人の京都大番役

三河以東御家人の鎌倉大番役

西国武士、荘園領主、雑人などの鎌倉・京都への訴訟、訴願

東国からの上洛、社寺参詣

などが、その主なるものである。『鎌倉時代の交通』第二鎌倉と京都との間——東海道と宿との発達(3)

かくて、京都鎌倉の両地を結ぶ東海道は、北陸、東海、西海、南海四道のうちから、今や政治経済上のみならず、文化的役割を果たす一大動脈となりつつあった。

したがって、“貴賤臣妾の往還する多くの驛の道”(『海道記』序)として、道路、宿泊施設等は整備され、往来は殷賑を加えた。

平安末期以来、主として東海道に発達した聚落を宿と称し、当時の交通の発達にともない、旅宿業者を中核とした交通聚落が生まれていた。

幕府は交通の衝に当たる駅制を、この聚落におき、既存の宿をこれに充当するのみならず、積極的に新宿を開設して、駅制の整備を計った。『鎌倉時代の交通』第二鎌倉と京都との間——二鎌倉幕府の交通政策—駅制—(2)

『海道記』の足柄山麓の關下の宿のところで、

關下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は人をやどして主とし、窓にうたふ君女は客をとどめて夫とす。

とあるのは、旅人を宿泊させる宿が軒を連ね、宿につきものの遊女の様をつたえて、当時の東海道の宿の情景を知ることができる。

このように交通が発達し、道路が整備された東海道であるが、はるか後世まで

も旅人を悩ました、河川、山、峠などの自然的障害が存した。

東海道を切断する河川は大小数十、大河の大半は、架橋困難のため、渡船によるほかはなく、風雨による増水のたびに渡河は断絶した。

ために、川留めとなって数日の滞留を余儀なくされ、河川の両岸には宿場が発達した。後世まで有名な大井河畔の島田宿、安倍川畔の手越宿などである。

東海道は地勢としては平坦な街道であったが、それでも小夜の中山、宇津谷峠、箱根峠などの、後世まで名を残す難所が横たわっていた。

また、道中の警察治安は十分でなく、山賊盗人等が横行して、旅人は常に不安がつきまとい、油断が許されなかった。

『海道記』によると、

若槻といふ處をすぎて横田山を通る。この山は白楡の影にあらはれて緑林の人をしきる處ときこゆれば、益なくおぼえていそぎ過ぐ。

はやすぎよ人の心も横田山

みどりの林かげにかくれて

と、“緑林”の危難を記している。

これよりさき承元4年(1210)、駿河の宇津山で源實朝の新婦である丹後局が、財宝装束等一切を強奪されたことを、『吾妻鏡』が次のようにつたえている。

御台所御方女房丹後局、自京都参着。於駿河國宇津山、爲群盜等、所持財寶並自坊門殿被整下御装束等、悉被盜取之由申之。

さて、東海道の一方向の到達点である鎌倉は、幕府が開設した新興武門の都市として、『海道記』では、

そもそも相模の國鎌倉郡は下界の鹿遊苑、天朝の築鹽州なり。

とあり、鎌倉の地を遊覧しては、

この處の景趣は、海あり山あり、水木便りあり、廣きにもあらず狭きにもあらず、街衢の巷は、かたかたに通ぜり。げにこれ聚をなし邑をなす、郷里、都を論じて、望み、まつめづらし。豪を撰び賢を撰ぶ、門郭、しきみを並べて、地またにぎはえり。

鎌倉時代紀行文学の考察

と京都と比較し、さらにつづけて武門の都の様を、將軍の館、寺社などにつき叙している。

『東關紀行』では、

そもそも鎌倉の初めを申せば、故右大將家ときこえ給ふ、水の尾のみかどの九つの世のはつえを猛き人に受けたり。さらにし治承の末にあたりて、義兵をあげて朝敵をなびかすより、恩賞しきりに隴山の跡をつぎて將軍の召しを得たり。營館をこの所にしめ、佛神をそのみぎりにあがめ奉るよりこのかた、いま繁昌の地となれり。

と、鎌倉の新開の由来を述べ、さらに鶴が岡八幡宮、二階堂、由井の浦の大仏の様を記している。

このように、鎌倉は武門の新興の都市として、また一見の場所であった。

しかも、東海道の道中には、古来歌枕にちなむ名所旧跡にも事欠かない。『伊勢物語』東下りの八橋、宇津の山、富士の山など世に知られた名所がある。

鎌倉に向かって、この東海道を東下する文人が、興を催して筆をとれば、おのずからここに紀行文学の華も開く所以である。

かくて、『海道記』『東關紀行』『十六夜日記』の三作品が雁行して登場してくる。

2 中世紀行文学の特質

日本文学史の上で、現存の作品では、『土佐日記』（承平5・935）を、紀行文学の先駆としてみることができる。

これ以後の作品には、ふつう『更科日記』（康平3・1060）があげられる。その起筆から、父の任国上総を出て京に上るまでの紀行的記事が、しばらく述べられている。しかし、これを作品そのものとして、全体的にみた場合、平安朝女流日記文学の代表作の一つであって、これを紀行文学の中に加えることはさし控えるべきであろう。

。なお、『土佐日記』について、叡山の僧増基法師の筆になる『いほぬし(庵主)』

(天曆 10・956) が存する。これは『土佐日記』が“男もすなる日記といふものを、女もしてみんとて、するなり”と、女性の筆に仮託したように、「いほぬし」という筆者に仮託して旅の記録を綴ったもので、紀行文学としてあげられている(鳴神克巳『日本紀行文藝史』第3章紀行文藝の発生(3)いほぬし)。別名『増基法師集』『増基法師熊野紀行』とあるように、「いほぬし」なる者が世を遁れ、前半熊野、伊勢、鈴鹿、津の國、逢坂山などを、後半は遠江の旅をつづけ、名所社寺などを訪れて、和歌を詠じたもので、紀行の形式をとった家集ともいえるのである。

すでに、歌集には、羈旅の部立があり、和歌の詞書に紀行を叙したものもあり、歌物語である『伊勢物語』の「東下り」の条などもあげることできるので、その系列のものとして、紀行的家集としておきたい。

そこで『土佐日記』につづく紀行文学の体裁のとのった作品としては、鎌倉時代に入って、『海道記』(貞應 2・1223)、『東關紀行』(仁治 3・1242)、『十六夜日記』(弘安 3・1280)の三つがあげられる。(朝日新聞社刊・日本古典全書では一卷に収める)

いずれも紀行として、その日次と途次を追うて、旅中の風懷を歌に詠じ、文にも叙して、紀行文学として結晶している作品である。この形式、態裁が、後代まで踏襲されていく日本文学における紀行文学の定型となる。

この三つの作品は、制作年次からは、『十六夜日記』が遅れることになるが、『土佐日記』の先蹤をつぐものとしては、これがその位置に立つものである。『土佐日記』が女性に託して歌人貫之が和文をもって綴ったように、女流歌人阿佛尼がなだらかな和文をもって記したものである。

今後の紀行文学は、このような歌人または連歌師の手によって生まれてくる。

これに対し、『海道記』『東關紀行』は、前者が僧籍にある人の筆であり、後者はまた市井に住む隠士の作であるところに、中世的なものをみることができる。

『海道記』の作者のごとく、僧にして和歌に秀でしものは、能因、西行をまつまでもなく、さきの増基法師もあり、これをことさらにとりたてるには及ばない。

まして、能因、西行、そして増基も、いずれも旅をたのしんで歌藝を豊かにしている。歌僧の旅の手記が生まれるのもまた至当なのである。

故に、ここで『東關紀行』の作者として、中世草庵の文学を生んだ隠者が登場してきたことを注目したい。

隠者として、その代表に立つものは鴨長明である。隠者文学の代表作たる『方丈記』（建暦 2・1212）の著者としてまた歌人として当時名を成していた。

この長明が、作者不明のままになっている『海道記』『東關紀行』の二著の作者に、久しく擬せられることになる。

鎌倉時代末の藤原長清撰『夫木和歌抄』（延慶 3・1310）や、江戸時代の澄月撰『歌枕名寄』では、『海道記』中の歌を挙げて長明の作としている。また伝本として故池田亀鑑博士蔵『鴨長明海道記』（天文ごろ書写）があり、室町時代末には長明作と見られていたことになる。板本でも、寛文 4 年（1664）板行の『鴨長明海道記』があり、跋語に、

此海道記始而一覽之時則命書生加校合。求得他本可改而已。慶長三年季秋
中澣。丹山隱士玄旨在判

とあり、慶長 3 年（1598）に細川幽斎が入手した本を底本としているというのである。

『東關紀行』の方は写本としてのこされているものに善本に乏しく、板本に正保 5 年（1648）板行のもの、遥に下って寛政元年（1789）板行の絵入小形本が見られるが、ともに『長明道之記』と題されている。

長明自身鎌倉に下向したことは、『方丈記』の成る前年建暦元年（1211）10月 13日の『吾妻鏡』の記事が伝えている。しかし、これを『海道記』の貞應 2 年（1223）、『東關紀行』の仁治 3 年（1242）の旅の記とは、年代的に隔りがあって符合しない。これによって、両著とも長明の作でないことが明らかになる。

なお、他に源光行、親行父子の名があげられている。

光行については、群書類従巻第三百三十、紀行部四に収められて、『海道記』の書名で、その本文の初めに「源光行」と記されてある。同じく『東關紀行』に、

光行が作者にあてられている。さきの『夫木和歌抄』では、これを『路次記』とあり、これより採録した歌を光行作としている。

親行の名は、徳川光圀編『扶桑拾葉集』（元禄 2・1689）巻十一に収められた『東關紀行』に、その本文の初めにこの名が見られる。群書類従第三百三十一紀行部五に収められた『東關紀行』の、本文の初めに「前河内守親行」と記され、さらに、その奥書に“右東關紀行上木行于世之本、稱鴨長明所著、今據夫木抄所載、從古本定爲源親行作”とあるのは、長明作にもふれていて興味深い。

このことは、東京教育大学所蔵の太田南畝舊蔵正保五年板本があり、『長明道之記』の題箋をとって、南畝自筆の『東關紀行河内守親行完』という題箋をつけ、奥書に“按是書也源親行東關紀行也而此引東鑑以爲長明事大誤”と附記してある。この作者を無条件に親行としたのは『扶桑拾葉集』、『群書類従』にそのまましたかったことによるのであろう。南畝の死去した翌年、文政 7 年（1824）に成った岡西惟中の『消閑雜記』に、

鴨長明が海道の記、世こそりて長明が作なりと思ふはいぶかしきことなり。

夫木抄のうち、富士の白雪の詠、かれこれ数首みな源光行が東行の詠とす、後の歌人考へみるべし。

とある。

この光行、親行父子については、『吾妻鏡』の記事で、親行は鎌倉に出仕して信任せられ、承久の乱に父光行が連座して誅せられるところを乞うて赦免されたという。のち、宰相中將實雅に従って上洛することがあり、ために鎌倉の不興をうけ、一時出仕を止められたが、再び帰参を許されて、鎌倉に在住、幕府の儀式宴席、役送等列し、源氏物語を講ずるなど、文化的活動をもって、幕府に仕えた。

承久の乱が、承久 3 年（1221）に起ったので、親行は、それ以前から鎌倉に出仕していれば、仁治 3 年（1242）の鎌倉の初旅を記した『東關紀行』の作者たり得ない。

このように、当時の文人隠士の名があげられて、その名を冠して伝えられたこ

とは、それによって作品を権威づける役割も果たしたのであろうが、この二作品が中世的紀行の典型として読みつかれていったことなので、興味深い。

さらに、この二著の文章が、中世文学の文章表現である、和漢混淆文をもって綴られていることである。

さきにも述べたように、『十六夜日記』は、女流歌人の作として純然たる和文をもって記されている。これに対し、とくに『海道記』は、拮据なる漢文調に和漢の故事を配し、当時の好尚にあった文体ではあろうが、漢文臭の強い文体である。

『東関紀行』は、それに比して、同じ和漢混淆文であっても、雅馴にこなれた文体である。

三者それぞれ特徴があって、いずれも当代において行なわれていた文体を代表するものである。

なお、中世的特色である仏教色が、僧籍にある著者の手になった『海道記』に、濃密に盛られていることも逸してはならない。

3 『海道記』『東関紀行』『十六夜日記』

a 『海道記』

『海道記』は、序、紀行、結尾の三部より成る整った構成である。

序において、まず自己の身上を述べ、これから目指す鎌倉の地の説明をし、旅行の概略を紹介して、老母をのこして旅立つ思いと、この旅の記について述べている。

紀行の部分は、鎌倉までの東海道の道中の記と、鎌倉滞在中の旅宿、遊覧を叙し、帰京のことを記して終わる。

結尾は、京にのこした老母への慕情と、筆者が僧であるが故に、東国を訪れたことを縁として、仏教の悟達と後世往生のことを述べて、終末を飾っている。

著者は、序の冒頭で、

白川のわたり、中山の麓に、閑素幽栖のわびびとあり。

と、自ら「わびびと」と称し、なおつづけて、

性器に底なければ、能を拾ひ藝を容るるにたるべからず。身運はもとより薄ければ、報を恥ぢ命をかへりみて恨を重ぬるに處なく、徒に貪泉の蝦蟇となりて、身を浮き草によせて力なきねをのみ泣き、空しく窮谷の埋れ木として、意の樹、花たえたり。

と、自らの人柄を述べ、年齢はすでに五十歳をこえたことは、

逝く水はやく流れて生涯は崩れなんとす。とどめんとすれどもとどまらず、五旬の齡の流車、坂にくだる。

と記している。

そして、仏に帰依して、出家の身となったことは、同じく序に、
僧を学び佛に歸する念やうやくに起る。

とあり、

世を厭ふ道は貧しき道より出でたれども、佛を念ずる思ひは遺怠とおこた
る。

また、

年ごろうちかなはぬ有様に、思ひとりて髪をおろす。

とあり、貧窮、不如意の境地が、出家を促したものと思われる。

著者は、この『海道記』を成すに当たって、序の末尾に、

これはこれ、文をもってさきとせず、歌をもってもととせず、ただ境にひ
かれて物のあはれを記するのみなり。

と述べ、結尾には、

これは羈中の景趣にあらず、存外の浅き狂言なり。

とあって、“羈中の景趣”を記す紀行文ではなくて、“境にひかれて物のあはれを記”した、“存外の浅き狂言”であると言う。

それであるが故に、

これただ家を出でし始め、道に入りし時、身の悲しみに催されて、人の嘲
をかへりみず、愚懷の爲にこれを記す、他興の爲にこれを書かず。

と、“愚懷の爲”に記した、紀行文というよりは、紀行中の感想を記したものとみられるのである。

この『海道記』の旅の、貞應2年(1223)の2年前、承久3年(1221)に、かの承久の乱があって、この東海道を、鎌倉と京都を往来して、事変の関係者があわただしい動きを示したことが、戦乱の生々しい記憶としてまだのこっていた。

承久三年六月中旬、天下、風あれて、海内、波さかへりき。鬪亂の亂將は花域(京都)より飛びて合戦の戰士は夷國(鎌倉)より戦ふ。暴雷、雲を響かして、日月、光を覆はれ、軍虜、地を動して、弓劍、威を振ふ。

と、その戦乱の状況を述べ、その果ては、都の朝廷側は敗れて、上皇をはじめ皇族はそれぞれ配流の身となり、朝廷方の“卿相羽林の花の族、落ちて遠く東關の東に散りぬ”と、乱に連座して断罪された廷臣たちの、この東海道の途上に、落命するものもあり、それぞれに昔の栄華の生活を憶っては、今の悲運を嘆いて、同情の涙をそそいでいる。

菊川の宿では、中御門中納宮藤原宗行卿のことを、さらに木瀬川から遇澤へと、死期の迫る宗行卿を追って、筆を走らせ、その死去に次の歌を寄せている。

都をばいかに花人春たえて

東の秋の木の葉とは散る

さらに、按察使藤原光親卿、前左兵衛督源有雅卿が、同じくこの遇澤の原で、“末の露もとの雫とおくれ先立ちにけり”としている。

そして次の歌を詠んでいる。

思へばなうかりし世にもあひ澤の

水のあわとや人の消えなん

実際は、光親が加古坂(籠坂峠)で、有雅は甲斐の国の小瀬村で斬られている。そして、光親が先に七月十二日に斬られ、宗行はつづいて同十四日、有雅がやや遅れて同二九日の順に斬られているのである。

先へ進むと、足柄の麓の急川(早川)では、高倉宰相中將藤原範茂卿の入水を、そのついでに、一條宰相中將藤原信能卿の、美濃の国遠山にて露の命を失ったこ

とを、つづけて叙している。

範茂卿の入水には、

流れゆきて歸らぬ水のあはれとも

消えにし人の跡と見ゆらん

信能卿の落命には、

思ひきや都をよそに別れ路の

遠山のへの露きえんとは

という歌を、手向けている。

そして、人の生死を思うては、

それ人の生れたるは庭に落つる木の葉の風に動くが如し。風やみぬれば動かず。死と思ふは旅に出づる行客の宿に泊るが如し。ここに別れぬといふともかしこに生れぬ。ただ煩惱の眼のみ見ざることを悲み、愚痴の心のみ知らざることを恨むべし。早く別れを惜まん人は、再會を一佛の國に約し、恩を戀ひん人は、追福を九品の道に訪ふべし。

今さらになに嘆くらむ末の露

もとより消えんものと知らずや

と、「旅」に託して、無常観を説く。

このように、『海道記』は、叙景を旨とする紀行文学的文章よりは、その旅中の事に触れて、映発する仏教的感想を述べるところが多い。

これを叙するに、引用した文章でもわかるように、四六駢儷体の漢文調の華麗な文体で、対句の妙を重ね、和漢の故事を配し、当代盛行の、意匠をこらした和漢混淆文を駆使している。

『海道記』の著者は、漢文の古訓にも習熟していたものと見え、古訓の漢文の体をまじえ、総じて漢文直訳風の拮据した漢文調なので、かえって、これが当代の好尚に投じた所以とも見られるのである。

なお、『海道記』の本文には、註記が混在して、本文と紛らわしくなっていることをも注目しなければならない。『海道記』には、所々に註記と見なすべき部

分が介在する。しかし、これは他人の筆の加わったものでなく、著者の自註で、これはこの作が書かれた当初から存したものと見られる。

古写本では、細字で書かれていたものが、転写の間に後人の手によって本文に混入してしまい、流布本では、さらにその註記の脱落も生じている。

このような、本文と註記の別を明らかにすることは、当然のことではあるが、この註が、他人の手によって加えられた註でなく、自註である場合、本文の中でも、註的説明の文章が挿入されることは常法としてあり、不自然を感じるほどの抵抗はなかろう。

b 『東關紀行』

『東關紀行』の結構は、序を以て起し、道中の見聞した記事に、鎌倉遊覧の記を加えて本文とし、帰京のことを叙して結んでいる。

作者は既述のように、当時の著名な文人をもって擬せられていたけれど、序の発端に、

齢は百とせのなかばに近づきて、鬢の霜やうやく冷しといへども、なすことなくして、徒らに明かし暮らすのみにあらず、さしていづこに住みはつべしとも思ひ定めぬ有様なれば、かの白樂天の、身は浮雲に似たり、首は霜に似たり、と書き給へる、あはれに思ひ合せらる。もとより金張七葉の栄えを好まず、ただ陶潛五柳の住みかを求む。しかはあれども、みやまの奥の柴の庵までも、しばらく思ひやすらふ程なれば、なまじひに都のほとりに住まひつつ、人なみに世にふる道になんつらなれり。これ即ち、身は朝市にありて心は隠遁にあるいはれなり。

と述べている。

この自己紹介によると、“齢は百とせのなかばに近づ”く、五十歳には達しない年齢で、“都のほとりに住まひつつ、人なみに世にふる”生活をすごしており、“身は朝市にありて心は隠遁にある”，身を巷間において、心は脱俗の境にあるという、市井の隠士を自認している。

その心の隠士である著者が、旅をするについては、序の後半の部分に、

かかるほどに、思はぬほかに、仁治三年の秋八月十日あまりの頃、都を出て東へ赴くことあり。

と、“思はぬほかに”“東へ赴く”用事が出来たことを述べ、なお結尾の帰京の段で、

かかるほどに、神無月の二十日餘りのころ、はからざるに、とみの事ありて、都へかへるべきになりぬ。

と、“はからざるに、とみの事ありて、都へかへるべき”ことになって、予定を早めて帰京の途につかねばならなくなった。これらの前後を考えれば、所用の旅にも見られるし、その記事の上からも、十余日の道中の見聞に対し、鎌倉滞留は二か月にわたるにもかかわらず、道中の記のみに筆を費すこと多く、鎌倉の記がこれに比して甚だ少ない憾みがあることよりして、鎌倉滞在が単なる遊覧でなかったことがうかがわれる。

著者の旅の意図をさぐることは、むしろ脇道にそれることになるので、ここでは道中の記がその大部を占めることの方が、紀行文学の本質からは尊しとすべきであろう。

されば、序の末に、

つひに十餘の日數をへて、鎌倉に下り着きし間、或は山館野亭の夜のとまり、或は海邊水流の幽なる砌にいたるごとに、目にたつ所々、心とまるふしぶしを書きおきて、忘れず忍ぶ人もあらば、おのづから後のかたみにもなれとてなり。

と結んでいるように、“目にたつ所々”の風景名所、“心とまるふしぶし”の旧跡や道中の出来事など書き記して、“後のかたみ”ともなる記念の書としたいという、のくだりを注目したい。

この執筆の目的からすれば、純然たる紀行文学を目ざしていることが明らかである。したがって、さきの『海道記』では、深い感懷をよせた、中御門中納言宗行卿のことにつき、同じく菊川の段でふれているが、

いにし承久三年の秋のころ、中御門中納言宗行ときこえし人の、罪ありて

東へ下られけるに、この宿に泊りけるが、「昔は南陽県の菊水、(以下略)」と、ある家の柱に書かれたりけりと聞きおきたれば、いとあはれにて、その家をたづぬるに、火の爲に焼けて、かの言の葉も残らずと申す者あり。今は限とて残しおきけむかたみさへ、跡なくなりにはけるこそ、はかなき世の習ひ、いとどあはれに悲しけれ。

書きつくるかたみも今はなかりけり

跡はちとせと誰かいひけむ

とあり、中納言宗行卿その人のごとよりも、書きのこしていった遺詠が消失してしまったことの憾みのはかなさを述べている筆づかいてある。

もちろん、これは『海道記』の旅が、承久の乱後2年の鮮明な事変として印象づけられていたのに対し、やはり21年のはるかな年月の隔たりが、このようにニュース性に乏しくなっていて、疎遠にうけとられるところもあったのかもしれない。

京を出発して間もなく、關山のところで、

關山を過ぎぬれば、打出の濱、粟津の原など聞けども、いまだ夜のうちなれば、定かにも見えわかず。むかし天智天皇の御代、大和の国飛鳥の岡本の宮より、近江の志賀の郡に都うつりありて、大津の宮をつくられたりと聞くにも、このほどは、古き皇居の跡ぞかしとおぼえてあれなり。

さざなみや大津の宮のあれしより

名のみのこれるしがのふるさと

のように、はるか万葉集にもうたわれている、いにしえの大津の遷都の旧跡を偲び、あるいは、

篠原といふ所を見れば、西東へ遥かに長き堤あり。北には里人住みかをしめ、南には波のおもて遠く見えわたる。向ひのみぎは、緑ふかき松のむらだち、波の色も一つになり、南山の影をひたさねども、青くして洗簌たり。洲崎、ところどころに入りたがひて、あし、かつみなど、生ひわたれる中に、をしかものうちむれて飛びちがふさま、葦手を書けるやうなり。都をたつ旅人、この宿にこそ泊りけるが、今は打過ぐるたぐひのみ多くして、家居もま

ばらになりゆくなど聞くこそ、變りゆく世のならひ、飛鳥の川の淵瀬にはか
ぎらざりけりとおほゆれ。

行く人もとまらぬ里となりしより

荒れのみまさる野路の篠原

に、叙景の妙と路上耳にとまった里人の話を添え、街道の推移に、心をひかれて
いる。とくに後の、浮島が原を叙して、

浮原が原は、いつくよりもまさりて見ゆ。北は富士の麓にて、西東へはる
ばると長き沼あり。布をひけるが如し。山のみどり影をひたして、空も水も
一つなり。蘆刈り小舟、所々に棹さして、むれたる鳥、多くさわぎたり。南
は海のおもて遠く見わたされて、雲の波、煙の波、いと深きながめなり。す
べて孤島の目にさへぎるなし。わづかに遠帆の空につらなれるを望む。こな
たかなたの眺望、いづれもとりどりに心ほそし。原には鹽屋の煙たえだえ立
ちわたりて、浦風、松の梢にむせぶ。この原、昔は海の上に浮びて、蓬萊の
三つの島の如くにありけるによりて、浮島となん名づけたりと聞くにも、お
のづから神仙のすみかにもやあるらん、いとどおくゆかしく見ゆ。

影ひたす沼の入江に富士のねの

けむりも雲も浮原がはら

のごとく、秀抜な筆を駆して、紀行文の妙を、随所にみることができる。

これらの文章に見られるように、和漢混淆文としては、ほどよくこなれて、漢
語漢文調が和文の中にとけこんだ、甚だ流暢な感じが溢れている。

漢文的表現の対句を用いることも、さきにあげた序の末の文例に見る

{	或は山館野亭の夜のとまり	}	にいたるごとに、
	或は海邊水流の幽なる砌		
	目にたつ所々	}	を書きおきて、
心にとまるふしぶし			

のたぐいで、読んで耳に快くひびく。

このほどよい和漢混淆文の快調は愛読され、『夫木和歌抄』にもその歌が多く

採られ、また軍記物語の粹である『平家物語(源平盛衰記)』にも影響を与えているところである。

c 『十六夜日記』

『十六夜日記』の構成をみると、大別して「旅の記」と、「鎌倉滞在の記」と、長歌の部分と三つより成る。

これらの三つの別が、きわ立っているだけに、これらをそれぞれ異った作品として、ただ寄せ集めたものとみることができるし、また、『十六夜日記』として、これら三つが一つづきのまとまったものとして伝来されてきたもので、そのままこれを単一なまとまった作品とみる考え方もできる。

前者の、別個の異った作品とみることを、裏づけるものに、九條家旧蔵本という写本が存する。これはいわゆる「流布本」とは別の系統に立つものである。

この特徴というのは、

- 1) 巻末の「長歌」がなくて、そこには『安嘉門院四條假名諷誦』というものが附いている。
- 2) 「旅の記」の部分が一綴、「鎌倉滞在の記」が二綴をなし、その各綴の終わりには、それぞれ奥書のようなものがついている。
- 3) 「鎌倉滞在の記」には、『東日記』という名が附せられている。

また、阿佛尼の子爲相の弟子藤原長清撰の『夫木和歌抄』(後出)には、阿佛尼の歌が収められているが、『十六夜日記』から14首、その14首が全部第一綴の中からで、『路次記』または『路次之記』の歌として採られている。第二綴の方からは全然採られていない。

こういう見地から、三つの部分を別個のものとして、その寄せ集めと判断する。(昭6・5『国語と国文学』所載・玉井幸助「十六夜日記の原形」、岩波文庫『十六夜日記』玉井幸助「解題」)

これに対し、流布本にみられるように、伝来されてきた形をそのままに、三者を一つづきのまとまったものとみる考え方がある。

この考え方は、作者の製作時点に立ち返って、その制作過程を重視しているの

である。「鎌倉滞在の記」の末尾に近く、

これもたびのうたには、こなたをおもひてよみたりけりとみゆ。下りしほどの日記を、この人々のもとへつかはしたりしを、よまれたりけるなめり。

同じく、末尾には、

都の歌ども、こののちおほくつくりたり。又かきつくべし。

とある。

前者の“下りしほどの日記”よりは「旅の記」が想定できるし、これを都の人人のもとへ送付したというのである。

このように一まとまりずつ送られたものが、人々の手に渡り書写されて、世に行なわれていった。『夫木抄』の撰者がみたものも、その一まとまりを所持していたのであろう。九條家旧蔵本というのは、そういう部分的一まとまりのものを三者全部そろえて合綴したものとみられる。

後者の“又かきつくべし”とは、「また書き継ぐべし」と読むべきで、このようにして、一まとまりずつ書き継いでは、都の人々のもとへ送り“つかはし”たものである。

しかも、ここでは、「鎌倉滞在の記」の都との歌の往來の消息記が、なお書き継がれることを予約して、作者としては、これを以て完結したものとは思えない。

つづいて、添えられた長歌が全く唐突な感じをうけるが、内容を読めば、異質的なものとして切り離すことのできる性質のものではない。鎌倉への旅の「路次の記」と、「鎌倉滞在の記」と、その滞在中に作られた長歌の作品とで、内面的には有機的な連繋を見ることができる。

これら三つの部分に大別できる型態を、形式の変化の妙とって言えぬことはないとしても、やはり、作者が一まとまりずつ送り出した時の型態がそのままのこされて、作者はなお書き継ぐ意図があって、これを未完のものとなったとみるのが妥当なところである。（日本古典全書・石田吉貞『十六夜日記』解説）

この『十六夜日記』の著者が阿佛尼であることは、確定して動かない。

阿佛の死（弘安 6・1283）より27年後に成った『夫木和歌抄』（延慶 3・1310）

に、既述のように、本書の中の歌を、「安嘉門院四條」（阿佛尼の俗名）の「路次記」または、「路次之記」の歌として、14首引いていることと、同じく死後31年に成った『玉葉和歌集』（正和元・1312）に、この四條の東へまかりし時の歌として4首引いていることが、これを証する。

著者の阿佛尼はすでに若くして『うたたねの記』の作がある。『十六夜日記』には“この山（三河国みやち山）までは、むかしみしこちするに”とあり、みやちの山の歌一首を詠じているように、この『十六夜日記』に先だって遠江に下向したことがあり、この旅のことが、後半に叙せられて紀行の体をなしている。純然たる和文で、平安朝女流日記の流れをくむものですこぶる叙情的、女性心理を感傷的に述べている。

この他『阿佛仮名諷誦』とか、作者としてはなお存疑をのこす『乳母のふみ』『夜の鶴』がつたえられている。

歌人としては『安嘉門院四條百首』をのこし、勅撰集にも『続古今』以後『新続古今』にいたるまで、40首余りの歌が入るなど、歌才に恵まれていた。

中世歌道の名門、当代の歌壇の第一人者藤原定家の嫡子爲家と結ばれて、3人の子をなした。

爲家によって歌学の伝授をうけ、歌才、文才を兼ね具えた阿佛の歌界における地位、實力は、重きを加えた。

この『十六夜日記』の旅は、さきの『うたたねの記』の旅と比べて、物見遊山の旅を楽しむためのものでなく、切実な、重要な用務を帯びた旅であった。

二度も光栄ある勅撰集の撰に当たった、定家爲家父子の“あとにしもたづさはりて”，爲家との間になした“みたりのをのこご共（定覚，爲相，爲守）”が、父の歌学を継いで、歌書をあずかり、さらに生活の支柱として、父爲家からは“道をたすけよ、子をはぐくめ、後の世をとへとて、ふかきちぎりをむすびおかれし細川”の荘（播磨国美囊郡）を、爲家の嫡男である爲氏によって横領され、“このうれへこそ、やるかたなく悲し”く“子をおもふ心のやみは、なほしのびがたく、道をかへりみるうらみは、やらんかたなく”，“あづまのかめのかがみにうつさば、

くもらぬかげもやあらはると、せめておもひあまりて”，鎌倉へ訴訟のために、“よろづのはばかりをわすれ、身をえうなきものになしはてて、ゆくりもなく、いさよふ月に、さそはれいでなんとぞ思ひなりぬる”，旅であったのである。

さきに述べたごとく、定覚、爲相、爲守のほか、なお父を異にする男子1人、女子1人の“いつつのこども”を都にのこして、阿佛尼は、齢は五十をこえた身を、建治3年（1277）10月16日、かくして鎌倉への旅に立ったのである。

流布本の末尾の裏書には、

此のあぶつばうと申す人は、定家の息、爲家の室なり。きんだち五人ましまし候。はりまの国ほそ川のしやうを、爲家よりゆづりおかれ候を、爲氏、他腹によりてあふりやう候。訴訟のために、鎌倉へ下られ候時の、道の日記にて候。（以下略）

という、後人の筆があり、簡潔にその要をつたえている。

以下略の文には、爲氏も鎌倉へ下向、兩人とも鎌倉にて死去とあり、鎌倉英勝寺内には阿佛尼の墓ありと伝えられるが、鎌倉滞在3か年、訴訟のため奔走するところあって、弘安3年（1280）帰京、同6年（1283）死去の事実が正しい。

訴訟の方は、阿佛尼生前において落着せず、爲氏の死去の弘安9年（1286）院宣をもって、“相傳領承相違あるべからず”という裁許が下っている。しかし、なお、この訴訟の争ひはひきつがれていくことになる。

さきにもふれたように、“みたりのをのこご共、ももちの歌のふるはぐどもを、いかなるえにかありけん、あづかりもたる”とあって、爲家によって形成された二條派歌道の継承者たることを自負していただけに、この『十六夜日記』もまた、その特徴が見られる。

二條派の歌学は、表面はあくまで、平凡、質素、すなおで、目だつこと、耳だつことを抑えて、内面に、深く幽かに、美と聖なるものをこめることを希求した。平凡至極のうちに、静寂と平和をたたえた、祈りに満ちた美しさがある。いわば渋さである。その渋ささえ隠した、平凡、穏和なのである。

『十六夜日記』も、このようにしてみることができる。

湯坂より浦にいでて、日くれかかるに、とまるべきところとほし。伊豆の大島まで見わたさるる海づらを、いつことかいふととへど、しりたる人もなし。あまの家のみぞある。

あまのすむその里の名もしら浪の
よする渚に宿やからまし

と、海辺の旅情を簡潔に叙し、“あまの家のみぞある”とおさえて、花も紅葉もない浦の苫屋よりも一層の淋しさを映している。

二條派の經典として、古今、伊勢、源氏があげられるが、ここには、旅行の記であるが故に、『伊勢物語』の投影が大きい。

“むかし、壁のなかより、もとめ出でたりけんふみの名をば”の冒頭からは、“むかし男初冠して”の伊勢の調子を思わせ、“よろづのはばかりをわすれ、身をえうなきものになしはてて”は、伊勢の“その男身をえうなきものに思ひなし”に通じ、以下随所にこのような相似が指摘できる。

二條派の性格が、この作品を伊勢物語風に和歌に詞書を添えたものを連ねた形式で、淡白な覚書的なものにしてしまったことは、後世のものには、もの足りない感じを与えずにはおかなかった。

この旅の目的である幕府訴願の所用の趣や、実子爲相、爲守らへの母性愛の記事があっても、それがドラマチカルなもりあがりを感じさせるところが乏しい。

前半が、「旅の記」であり、後半は、「鎌倉滞在の記」であって、これこそ『十六夜日記』の「日記」に当る部分なのである。ここには最初に、

あづまにてすむところは、月影のやつとぞいふなる。浦ちかき山もとにて、
風いとあらし。やまでらのかたはらなれば、のどかにすごくて、なみのおと、
松の風、たえず。

と鎌倉の住居の様を記すだけで、他の二作品のような、鎌倉遊覧の記事を欠いている。もっぱら都人との歌の贈答、消息の記に尽きる。これを、内容から二條歌学の歌の書ともみることができる。

このように、地味で平淡な内容をもって、しかも未完の体裁をもった作品が、

鎌倉時代紀行文学の考察

写本として比較的多くが残されたということは、やはり直接定家門流につながる二條派爲家の室で、歌壇でも名の知られた女性の作であったからであろう。

爲氏の後によって二條派が継承されとしても、爲相の流れである冷泉派や、京極爲兼を生んだ京極派が、やがて競いあって歌壇を交替するが、いずれも定家の門流で後世の歌壇に君臨し、この書もその大きな庇護のもとにめぐまれたかたちで書写伝存されたものに違いない。

参 考 文 献

日本古典全書『海道記・東關紀行・十六夜日記』玉井幸助、石田吉貞校註（朝日新聞社）

『日本旅行史』吉田十一（日本交通学会）

『日本交通史概論』大島延次郎（吉川弘文館）

日本歴史叢書 18『鎌倉時代の交通』新城常三（吉川弘文館）

『日本紀行文藝史』鳴神克巳（佃書房）

『改訂中世草庵の文学』石田吉貞（北沢図書出版）